

2. 性差に基づいた医学・医療の考え方

山口大学大学院医学系研究科保健学系学域 松田昌子

医学の歴史の上で、生殖器のように男女それぞれに備わる特有の臓器は、性差を明確に区別して対処されてきた。しかし、生殖器以外の臓器の性差に関しては、ほとんど関心はもたれなかった。近年、男女を分ける性染色体や性ホルモン、特に卵巣から分泌されるエストロゲンの機能が明らかになるにつれ、それらが生殖器系臓器以外の臓器に及ぼす影響は大きく、医学上無視できないものであることがわかってきた。小児科学や老年医学が年齢の違いに基づいた医学であるように、性差医学は男性と女性の生理学的な違い、疾患における臨床的な違いを明らかにする学問である。性差医学から明らかにされたエビデンスに基づいて実践される医療が性差医療である。

では、性差医学はいつ頃、どのようにして始まったのであろうか。従来、生殖器系疾患以外の医学研究は薬の治験も含め、臨床実験も動物実験も多くが男性、オスを対象に行われ、そこから得られた結果を男女の区別なく用いてきた。その理由として、男女共通の臓器に差があるとは考えられなかったこと、研究者側にとって、実験が月経周期に影響されないため、一定の結果が得やすく、費用や実験期間が節約できるという利点、患者側には、妊娠の可能性のある閉経前の女性は薬や実験から発生するリスクを避けられるという利点があったことが考えられる。しかし、そのために女性に関する医学データが極端に少ないという状況が作られることになった。

閉経前の女性の健康問題は、出産に関連したものが多く、エストロゲンの種々の作用のおかげで多くの疾患の罹患率は男性に比べ低い。しかし、閉経後、エストロゲンの減少とともに、動脈硬化

や骨粗鬆症の進行速度が増す。平均寿命の延長と共に、女性の健康問題は生殖に関連したものから生殖器以外の臓器の問題に変化してきた。そこで、ようやく、非生殖器系臓器に関する女性の医学データが非常に少ないということが認識されることになった。生殖器以外の臓器の医学研究の対象を女性にも広げ、早急にその後れを取り戻す必要があると気付いたのは 1980 年代の米国の研究者たちであった。

米国では 1990 年に、NIH の中に The Office of Research on Women's Health (ORWH) が開設され、性差が健康や疾患に与える影響についての研究を促進するために、臨床研究の研究費申請には研究対象に男女を加えることを条件にした。1991 年には巨額の資金を投じて大規模試験、Women's Health Initiative (WHI) を立ち上げ、閉経後女性の死や障害、QOL 低下の原因の究明を目的にした前向き試験を開始した。こうして、遅れていた女性医療の研究を強く推進した。ORWH による研究面での女性医療の推進と平行して、米国公衆衛生省に The Office on Women's Health (OWH) が設置され、女性の総合的な健康の推進を目指して、①疾病予防事業の普及、②研究、③一般人および医療従事者の教育、④医療および科学研究領域における女性の地位の向上という目標を掲げ、より実践面での女性医療の改善を目指した。このような国を挙げての取り組みは、これまで知られなかった医学的性差を次々に明らかにし、医学の新しい領域として、性差に基づいた（性差を考慮した）医学・医療 Gender-specific Medicine (GSM) の幕開けとなった。

松田昌子氏プロフィール



山口大学大学院医学系研究科保健学系学域 教授、山口大学医学部附属病院「女性診療外来」主任。

1973年 山口大学医学部卒業。1976年～1978年 米国マウントサイナイ病院勤務。1978年 山口大学医学部第二内科入局。1987年 山口大学医療技術短期大学部講師。1988年 同助教授。1994年 米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学循環生理学研究所（文部省在外研究員）。2000年 山口大学医学部保健学科教授。2003年 山口大学医学部附属病院「女性診療外来」主任（併任）（現在に至る）。所属学会：日本内科学会、日本循環器学会、日本性差医学・医療学会、日本女性医学学会。社会活動：山口県医療審議会委員、山口県医師会男女共同参画部会部会長。